

紹介

アントニオ・ダ・クレマ著
(ガブリエレ・ノリ編)

『一四八六年の聖地巡礼記』

Antonio da Crema, *Itinerario al Santo
Spolito 1486*, a cura di Gabriele Nori

本書は、アントニオ・ダ・クレマという一五世紀マントヴァ人の巡礼記に、編者ガブリエレ・ノリが解説及び注を施した史料である。ピサの学術出版社が最近企画した『イタリア巡礼全集』の第三巻として刊行されたが、この全集は、四世紀から二〇世紀に渡るイタリア関係の巡礼テキストを集め、それらを、一、外国の聖所へ向かったイタリア人巡礼、二、イタリアの聖所へ向かったイタリアからの巡礼、三、イタリアの聖所に向かった外国からの巡礼に種分けし、文献学的・歴史学的な解説を加えて出版することを目的としている。イタリアでは近年、従来宗教史に限られていたようなテーマー説教・聖人伝などーが、新たな装いのもと歴史家の注目を集めているよう

に思われるが、巡礼全集の刊行もこのような流れに沿うものであろう。本書は三冊目で、第一巻は一九九一年に出版された。

キリスト教における巡礼という現象は、その最初期から存在したが、一〇〇〇年頃から盛んになり、道や宿場が整備されるようになる。聖地エルサレム、ローマ、スペインのサンチャゴ・デ・コンポステーラが三大巡礼地であり、巡礼のための手引き書も書かれた。しかし、旅行記として一番興味深い史料は、聖地エルサレムに向かった人々が残した巡礼記であろう。西ヨーロッパの人々にとってエルサレムは遠く、船に乘ったり異教徒の支配する地を通ったりして、詣でなければならぬからである。聖地巡礼のための乗船地としてはイタリアや南仏の港があったが、中世後期にはヴェネツィアから乗船することがほぼ必然となった。一五世紀にはヴェネツィア経由の聖地巡礼が最盛期を迎える。そして、巡礼記もただの手引き書から、著者の感想や体験を盛り込んだ内容豊かなものになっていった。ここで紹介する巡礼記も、そのような史料の一つである。

まず序論で、巡礼記の著者であるアント

ニオ・ダ・クレマの出自・経歴が述べられる。彼は一四三五年、イタリア北部の町マントヴァで生まれた。マントヴァでは一四世紀から、後に文芸・芸術のパトロンとして名を馳せるゴンザーガ家が実質的な君主として統治を行っていたが、アントニオの家も祖父の代からゴンザーガ侯に仕えている。アントニオ自身もマントヴァの行政官として各地で働いていた。これらは全て編者がマントヴァの古文書館の未刊行史料に基づいて再構成したものであり、著者の教養・社会的地位を知る上で貴重な情報である。また編者は、他の巡礼記と比較した場合の、この巡礼記の特徴もまとめており、簡単にはこれらの史料を読み比べることができない我々には大変参考となる。日程と航路の表も、巡礼旅行の全体像を捉えるには有効であろう。なお、序論では当時のヴェネツィアの巡礼輸送システムについても触れられているが、これは他に詳しい文献があるので、そちらを参照した方がよい。

さて、巡礼記の内容は、アントニオがマントヴァを出発したときから聖地詣でを終了して再びマントヴァに帰るまでの出来事・途中の街や鳥々の説明を、日記のよう

な形式で書いたものである。彼が出発したのは一四八六年五月二一日、六月六日にヴェネツィアから出航し、同年一二月故郷に戻った。毎日書かれたものではないが、何月何日何時頃どこに着いたか、一つの寄港地から次の寄港地までどのくらいの距離があったかということ、特に往路ではこまめに記録されている。また、各地で拝むべき聖遺物の説明や、聖書にちなんだ場所の解説も怠らない。

しかし彼の巡礼記で特徴的なのは、古典古代の作品の引用が大変多いことであろう。父親の影響で深い人文主義的教養を身につけていた彼は、イオニア海にはいるとギリシャ神話や古代ギリシャの出来事に言及し始める。ギリシャに近づいたとき、彼は神に向かつて祈り、古代ギリシャ人がキリスト教を知らなかったといつて非難した。が、祈りの内容は逆にギリシャ人の偉大な功績を讃えるようになっており、彼の古典古代への傾倒を示している。また、船乗りたちが奇跡だと信じている、そしてアントニオ自身も神の技だと主張する聖エルモの火について、「これは、人工の火だという人がいるかもしれないが」と、わざわざ断つて

いるあたり時代を感じさせる。一五世紀後半のマントヴァ宮廷に仕えた彼の巡礼記は、かなり宗教的色彩の薄いものであった。

次に、彼の巡礼記で興味深いのは、ヤッファの港についてから上陸するまでのイスラム教徒との交渉の様子、エルサレムでの自由行動の間の見聞である。巡礼がイスラム教徒の風習やマホメットの教えについて書き記すことは珍しくないが、アントニオの描写は非常に生き生きとしている。例えば、船が港に到着すると、まずイスラム教徒の監査官が船にやってきて船長が彼らをもてなすことになるのだが、そのときの彼の記述「彼らは殆ど食べないがよく飲み、コップ一杯のワインを一息で飲み干してしまふ。そして口を曲げて、病人がいやな薬を飲むときにするような変な顔をする。」等には、アントニオの観察力と描写力がよく生かされるといえよう。また、巻末には、聖地で船長が支払うべき事柄とその金額がリストアップされており、案内料やキリスト教徒にとって重要な場所の見学料などの相場がわかるようになっていいる。他に、対トルコ情勢の記述なども興味深いである。

これら全ては、この巡礼記に、単に当時の道のりや人々の宗教的経験を知らんとすることを超えた、社会的・文化史的な史料としての価値があることを示している。単にイタリヤを研究する者だけでなく、途中の経路に当たる街の専門家やイスラム研究者にも興味深い本であることは間違いないだろう。

(B5判 一九三頁 一九九六年一月
Pisa, Pacini Editore, 25000 Lire)
(高田京比子 京都大学人文科学研究所助手)